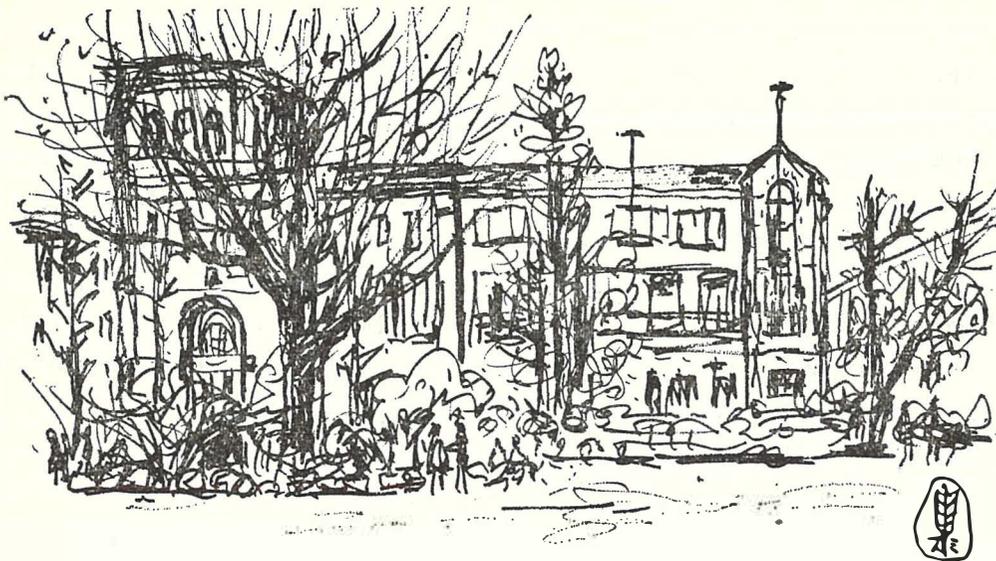


ひふりおてか



同志社大学図書館報 No. 4. 1969.2.1

新図書館建築の経過

徳永清行

図書館長

今出川校地内の烏丸今出川角地で若干の空地が設けられてそのままとなっていますので、新図書館建設についてのうわさが取上げられ勝ちであります。さらに今年8月15日の同志社タイムスに「姿を消す啓真館跡に図書館建設」という見出しで記事が載せられました。そのような一連の動向から、程なく建築が始まるであろうとの印象が高まったのであります。図書館の立場としては一切無言の経過とも思われぬでもないようであります。噂さに上っているところは先走っていますし、図書館側では前館長のころより時間をかけての検討が続いていますので、一応、概畧を報告することにした次第であります。

施設の場所としては、大体、上記のあたりということになりましたようですが、まだ決定的には言明しがたいままの段階であります。そうした制約の下においての構想を出でがたいで、規模にあっても、従来のモデル・プランは何回か変転して今日に及びました。本学の実情に即して、図書館側の求めている輪郭を描くにとどまらざるを得ないことを豫めお赦し下さい。

本誌第2号には延3,000坪となっていました。記録によれば昨年度の決議事項ではありますがその後の試案では縮小され、それがやや復活して、総建坪約2,500坪、敷地約500坪というあたりであります。建物としては、地下1階、地上4階（建築上の制約があって、これ以上の階層は不可能）という目標をもっており、閲覧座席数は最低1,000席を必要とみえています。

本図書館の現有蔵書は20万冊を超えており、年間増がありますから、将来においては、50万冊の容量が必要となるのであります。それに若干の余裕を見込んで、10万冊を加え、60万冊の収容量を必要とするのであります。ここではこのような数字を出しましたが現実の蔵書は少ないと反省していますし、その内容についても、和書、洋書の比率についても考え直さねばならぬ時期に来ていることを感じております。新図書館には将来に備えての考慮を織込さねばならぬであり、閲覧室の整備は、もとより学生諸兄弟の期待に副うものであることは多言を要しませんが、良き学習者、良き研究者、よき教育者への課題を果すべき閲覧施設を見失わないように心掛けております。レファレンスワークのための諸施設や、視聴覚関係設備等も重要施設の対象として取上げていますが、電子計算機の導入も勿論考慮より外してはおりません。将来の図書館を想えば、こうした施設の強化は絶対的のものというべきであります。こうした施設の一環として、小講堂というような設備、言い換えれば、図書館利用者のためにも、図書館職員のためにも、こうした設備によって、図書館の機能を高めたいとの構想をもっております。

学生諸兄弟に対する奉仕として、図書館は資料的指導と勉学意欲の高揚に大きい役割をもっていることは当然であります。教員の研究に対する奉仕についても大きく考えております。本学の場合、各学部の研究室が分散しており、また敷地に余裕のない現状にあっては、新図書館の建設については、研究室等との関連を顧慮して、相互利用の実を挙げたいのであります。学内の図書相互利用にとどまらず、さらに大学間の図書相互利用に資する役割をもつ諸総合目録の整備には、ご期待には距離があるとしても、すでに着手しているのであります。

新図書館の建設については、学内各方面の強力な支持によって、基本方針は承認されているのであります。建設に向って前進しているわけですから、出来るだけ早く、快適な勉学の場所を供し得るように、一段のご理解とご協力を大きく仰ぎたいのであります。本誌第3号に、本学法学部卒業の佐枝武兄より寄せられた一文によれば、新図書館建設についての物心両面よりの改善要望が強く述べてありますが、併せて学生有志から折にふれての温い助言を受けております。建設のおかれている現状に照して、味読し、感謝している昨今であります。

同志社大学蔵書目録 第1巻 の発行について

本誌第2号で予告した「同志社大学蔵書目録」の第1巻が、ようやく発行の運びとなりました。この第1巻には、昭和39年4月から41年3月までの3ヶ年間に、本学図書館で受入整理した全学の図書資料（ただし、雑誌・新聞は、別途にその目録を編集中であり、この目録には収めていません。また人文科学研究所の図書と、アメリカ研究所の洋書もこの目録から除外してあります）約21,000余タイトルを収録しています。経費の都合により、オフセット印刷ですが、B5版、本文800頁、索引100余頁の大部なものであります。

この目録は文献の所在を知るために必要な資料であると同時に、これら文献の相互利用と機関相互の協力体制を確立していく上で重要な役割をはたすものですが、この1冊で学内の図書資料の全てをカバー出来るものではなく、ようやく冊子体目録の最初の第一歩を踏み出したものにすぎません。今後こうした蔵書目録を逐次刊行し、図書資料を検索するための目録をより充実したいと考えていますが、この目録が教職員の研究、学生の学習の手引の一助に役立つものと期待しています。

大学図書館について

—図書館実習生の所感—

本学図書館に於いて、昨年9月9日より10月4日まで、約1カ月間にわたって、図書館学司書課程の学生約100名を受け入れ、図書館実習を行なった。その際、各実習生に図書館実習を通じて見た図書館についての所感を書いてもらったので、そのうちの主なものを取りまとめた。これによって実習生が利用者側の立場からではなく、奉仕の立場、管理、運用の立場から、図書館をどのように見、どのように感じたか——云いかえれば、図書館の現状の一断面を認識していただけたと思う。

本号では、主として、実習生の所感を共通の項目に分類して、並列的に記載することとし、さらに、次号では、実習生の所感に対し、図書館側のコメント並びに意見等をおりまぜて、2回にわたって特集する。

図書館に対する第一印象

同志社大学図書館の実情を見て、実習生の殆ど全員が異口同音にこれまでの図書館に対する認識が不足だったと述べている。

『実習を通じて、まず最初感じたことは、図書館の単なる表面とはまるで異った裏の世界がある事である。又その仕事は、図書館にとって決して欠く事の出来ないものである。利用者としての目からの図書館は裏に仕事があると思っていても、それは、ただ漠然とした概念にすぎず、実際に行ってみて始めて理解出来るものだと思った。(社会福祉学科 K生)』

『同志社大学図書館に於いて、庶務、整理、閲覧の三課より成り利用者の眼に触れない所で、より多くの館員が働いている。私達は今まで、その多くの人々を実感として把握していなかった。(国文学専攻 S生)』

『同志社で受入れられた一冊の本が図書館の書架に、また研究室の棚に並べられるまでに要する人員と日数は、これまで想像もつかなかった程である。そして、一日に入ってくる書物の数、年間に受け入れられる本の数、そして全蔵書数など、見るもの聞くものに感心させられた。(国文学専攻 M生)』

『とにかく本をたくさん読んでいいだろうという今までのイメージはきれいに洗い流され、図書館の仕事はじみで忍耐のいる、むづかしい仕事であると痛感した。(文化学科 O生)』

『私が実際に図書館実習に携わってみて第一に感じた事は想像以上に激務であるという事である。一般的に見て図書館に対し社会人、学生とも単純で体力を要さず女子でも可能な仕事であるとの見方だと思われる。しかし、閲覧にしても外面から見るだけのものでない事は実際に仕事にタッチしなければ理解できるものではなからう。(文化学科 T生)』

2. 図書の利用方法

利用者たる学生は利用の仕方が不十分だったと述べている者が多い。

『蔵書がこんなに沢山あるのに今まで図書館を自習室の如く考えて本を借りようとしなかった。卒業前になってくやしく思えなければならない。(文化学科 F生)』

『今まで我々は大変まずい利用法をしていたのを痛切に感じた。例えばカードの引き方一つでも多方面から自分の求めるものを捜し出す事が出来ることを知った。単に行き当たりの捜し方では十分の一の効果しかない。(教育学専攻 M生)』

利用者の媒介たる図書館は利用のさせ方が積極的でない。そこで、実習生は利用者のために、図書館が改善すべき問題点を指摘している。図書館利用の手引きとP・Rについて

『「利用案内」をもう少しわしくし、目録の排列、ローマライズの色わけなど述べたら、より利用しやすくなるのではないかと思う。(国文学専攻 N生)』

『入学時のオリエンテーションに必ず図書館利用の方法を全学生に指導して欲しいと思う。蔵書の数を誇るだけでは何にもならない。それがフルに活用されなければ意味はない。(教育学専攻 I生)』

『他大学図書館の利用の仕方、レファレンスの活用、目録の引き方など、実習することによって初めて積極的な利用者となり得るようです。目録の排列方法など、以前から知っていたらどんなに便利であったかと思われる。説明の際、「よく利用していたらわかる」と言われたが、一般の学生に対するP・R不足を感じたのはまちがいでしょうか。(教育学専攻 K生)』

図書館が閉架図書を充分に利用させるべきだという見解は随所に述べられている。これに関連した開架図書について『実習して驚いたことは、書庫にとてもたくさんの図書があったことです。こんなにたくさんの図書があっても実際に目録を引いて探すとなかなか思うような図書に出会わないことが多いし、閉架式が開架式になれば利用度の多い本もでてくるのではないかと思いました。(教育学専攻 Y生)』

『開架式ならもっとよく利用されるのではないかと思ったが、それは蔵書数から見て無理だから、開架式の枠を広げるとか、1年に1回希望者に書庫を開放するといった事は出来ないだろうと思う。(英文学科 T生)』

『開架式にも欠点はあるが、新しい図書館に移転される時は、なるべく開架式の図書をふやしてほしい。

(国文学専攻 H生)』

各学部研究室の図書について

『同大のように各学部研究室の図書が学生の利用が出来ない所に於いては、もう少しその便宜をあたえるべきであると思う。

(国文学専攻 H生)』

『同大図書館において20万冊の本を所蔵しておられるが、その他にまだ同志社の本が45万冊も各所に散在しているとうかがった。諸条件がそろわなければ、実現は困難かと思われるが、図書館の人々のお力で少しでも早く約45万冊が、容易に利用者が閲覧出来るよう、研究室や学部などと図書館と図書の一体化を実現出来ればと思う。(文化学科 K生)』

3. 図書の整理、参考業務、設備・施設等

利用に供される前の段階である図書の整理について

『一冊の本が書架上に並ぶまでに、おどろく程たくさんの労力が費やされる。けれど、あくまで本は読まれるものである。したがって利用者のために整えたこれらの準備の段階では図書館の機能は半分しか果されていないのと同じであろう。

(文化史専攻 Y生)』

『目録カード作製のみがいつ迄も図書整理の仕事であるのではいけないと思う。(文化史学専攻 N生)』

レファレンス・サービスについてはさすがに実習生の半数がなんらかの言及をしている。

『閉架式の書庫に眠っている資料を利用者と結びつけ、生きた資料とするのが参考係の大切な役割である。同志社では参考事務はあまり活発でないが今後力を入れて欲しい。参考係の為の特別の係員とコーナーがあれば利用しやすい。

(国文学専攻 M生)』

『レファレンス業務をもっと積極的に行い目録カードのひき方をはじめ、様々の質問に対する回答を行うようにすべきだと思う。現状では質問もそれほど多くなく係も兼任であるということだが、専門の係員を設置し、利用者にもその役目をもっと広く知らせるべきだと思った。(美学専攻 K生)』

参考業務と同様に実習生のはほぼ半数が視点の相違はあれ、設備施設の充実をはかるべきだとの所感が述べられている。

『図書館というとそれとなく重々しく陰気な所を想像するのであるが、やはり広く明るい所が健康的かつ機能的なのではないだろうか。今回の実習で図書館関係の場所は全部廻ったわけであるが、狭いという事と薄暗いという事が非常に印象的であった。(文化史学専攻 H生)』

『有隣館で実際に業務にたずさわったが、カウンターが狭すぎるのではないかと思う。利用者、係員、相手ともに不便な様思った。自由閲覧室でも同様である。スペースの関係上無理かも知れないが……しかし、やはり、図書館全体が狭いことも合わせて残念である。(文化史学 M生)』

『一日も早く新しい図書館が建設され仕事の環境が改善されると良いと思う。そうすればもっと仕事が円滑に行われるようになり利用者の要求にも迅速に応えられると思う。(国文学専攻 S生)』

愛山文庫



明治から大正初期にかけての史論家・評論家として有名な山路愛山の旧蔵書が当館に寄贈されて愛山文庫が設置されたのは1917年(大正6年)7月のことである。旧蔵者山路愛山は1864年(元治元年)12月26日、幕府天文方(旗本)の家に生れ、本名を弥吉といい、のち愛山と号した。明治維新後の変動で、その生家は没落し、青少年期を貧苦のうちにすごし、小学校は優秀な成績で卒業したが、進学することは経済的にできなかったので、自活、独学で小学校助教員になった。ときに16才、このころからキリスト教にひかれ、のち平岩愼保の導きで1886年(明治19年)頃受洗し、平岩の推薦で東洋英和学校(現在の麻布学園)に舎監として勤めるかたわら、神学を修めた。卒業後は静岡で約3年のあいだキリスト教の伝導に従った。ついで1892年(明治25年)徳富蘇峰の民友社に入ってから、本格的に論客として活躍し、以来、その健筆を縦横に走らせるようになった。その文筆に優れたことと、多方面にわたって独創的な見解を発表したことは著名である。その分野は文芸・歴史・政治・社会・時事問題などきわめて広く、また、その論文を掲載した雑誌、新聞も「女学雑誌」「国民之友」「国民新聞」にはじまり、「中央公論」「太陽」などの一流総合雑誌から「女学世界」「中学世界」といった青少年向きのものまで幅広く種類

もまたすこぶる多い。1899年(明治32年)蘇峰の推挙によって「信濃毎日新聞」に主筆として赴き、1903年(明治35年)には「独立評論」を自ら刊行し、1910年(明治43年)には「国民雑誌」を創刊し、1912年(大正元年)に「信濃日日新聞」が発刊されると、その主筆として再び信州に赴き、執筆に講演に多忙な日々をおくった。その間、本学をはじめ、早稲田、慶応などで講師として教壇に立ったこともあるが、1917年(大正6年)3月15日、この明治、大正の第一級の論客も、54才の生涯を閉じ東京青山墓地に葬られた。その著書もすこぶる多く、なかでも、「豊太閤」「西郷隆盛」「足利尊氏」「支那思想史」「基督教評論」「現代金権史」「社会主義管見」などが著名であり、また毛利家の「防長回天史」には編集主任として参画した。

愛山文庫は愛山歿後間もなく、大原孫三郎氏(実業家・社会事業家)によって当館に寄贈された。総冊数は3,568冊で、うち和漢書3,267冊、洋書301冊であり、その殆んどが日本史関係のものであるのが特徴である。この文庫も、はじめは別置されていたと思われるが、何時のころからか一般図書と混排されてしまっているので、現在の正確な冊数は不明であるが、現在当館に保管されているカード式目録によると、「白石遺文」「柳営秘録」「文久秘録」「伊達兵部少輔逆乱記」「桜田落花記」などの写本、「回天実記」「維新史料」など1887年(明治20年)頃、野史台から編刊された図書の多くが含まれていることが知られる。なお、洋書のなかには明治期に広く読まれた「Guizo, F. P. G. : General history of civilization in Europe」の9版アメリカ版などがあり、また、雑誌「旧幕府」も第1巻第1号(明治30年4月)から第5巻第7号(明治34年8月)までが揃っている。

叢書・全集類の利用

叢書・全集類に収められている個々の著作を容易に探し出すためには、内容細目を作り、内容の個々の著作の主題や、著者、書名から検索できるようにした叢書目録や、叢書索引があると大変便利です。いままでいくつかの叢書目録や索引が作られていますが、そのうち特に利用価値のあるものを紹介し、それらのツールの活用をはかっていきたいと思います。

1. 遠藤元男, 下村富士男「国史文献解説」正統2巻 朝倉書店 昭32.9—40.11 (新028.21; E)

正編は第1部、各時代の個々の成書文献、第2部、同叢書・全集類、第3部、国史研究上重要な外国文献の3部からなる解題書目です。巻末には第1部、第2部主要書目索引(文献の別名、略称もなるべくかかっています。)難読書目一覧、第3部主要書目索引がついています。続編は第1部、第2部は正編のそれぞれの部の補充です。第3部は地方史関係の文献目録、第4部は主要な新聞、雑誌と19世紀国内発行の外字紙の解説、国立国会図書館所蔵の新聞既成本目録、外字紙の所在目録、巻末索引として第1部、第2部主要書目索引、第4部新聞、雑誌名索引、外字紙索引がついています。本書は大変便利なツールです。

2. 広瀬 敏『増訂日本叢書索引』風間書房 昭32.9 93, 9, 761P. (旧016.081; H—la)

昭和31年までに刊行された叢書・全集類で、叢書目録、叢書略解説、50音索引、難字画引、叢書索引からなり、50音順に配列された内容の個々の著作をひくと、その個々の著作を収録している叢書、全集名がわかります。本書は比較的よく利用されるものの一つです。

3. 渡辺 茂「増訂総合史料索引」小宮山書店 昭34.4 606P. (謄写) (旧039; W2)

明治初年から昭和32年までに刊行された日本史料を収録している叢書類 652種の総索引で、研究上必要な史料がどこに収められているか、その所在を確かめることができるようにしたもので、叢書名索引と史料索引からなり、頭字索引がついています。前記の「増訂日本叢書索引」と併用して使用するといっそう便利です。

4. 矢島文亮「叢書講座全集論集 502 種分類索引」: 文科教育系 日本文献学会 昭33.6 270P. (謄写) (旧039; Y)

明治以後昭和31年までの文科系統の叢書、全集、講座、論文集所収のもの索引です。

5. 「第四高等学校和漢叢書細目」大13.8 594P. (旧017.77; K8)

大正12年までのものを収録しています。本邦と支那に分け、それぞれ家叢、専叢、雑叢の如く分けています。叢書名の五十音順配列(本邦専叢は系列)で、内容書名の五十音順索引のほかには叢書名五十音順索引と難読字画順索引があります。

このほかには叢書・全集類の内容索引がつけられている各図書館の蔵書目録を利用することができます。

6. 「大連図書館和漢図書分類目録」第1—第8編、各編追録、増加図書目録 昭和11—14年度 昭?—17. 8.

第1—8編は主題分冊し、昭和2年3月末現在までのものを収録、各編追録は昭和2年4月から11年3月までのものを収録、昭和11年4月以降は年刊の増加図書目録として刊行。各冊とも内容書名の五十音順索引がついています。

7 「学習院図書館和漢図書目録」上・下2巻 昭4.3—5.12 (旧017.77; G—la)

昭和2年12月末現在までのものを収録、古典には内容書名の五十音順索引があるが、新書に対してはありません。

8. 宮内庁書陵部「和漢図書分類目録」昭27.3—30.3 3冊(上・下・索引)並びに増加1 43.3 (新029.3; K)

昭和26年3月末現在のものを収録したもので、明治以降の活版洋装本は除きます。索引は書名索引(五十音順配列)、著者は漢字頭字画引索引とからなります。増加1はその後の昭和26年4月から昭和42年3月末までの図書を収録したものです。巻末には五十音順配列の書名索引がついています。

9. 「京都帝国大学附属図書館和漢書分類目録」第1—第3冊 昭13.3—16.9 (旧017.77; K4—3)

第1冊総記、第2冊科学、第3冊工学、昭和10年末現在までのものを収録、各冊とも内容書名の五十音順索引がついていま

す。第3冊工学だけは別冊として著者索引がついています。

10. 無窮会「神習文庫図書目録」昭10.1 520, 163P. (旧017.9; S)

昭和10年1月現在までのものを収録、内容書名の五十音順索引がついています。

11. 「内閣文庫明治時代洋装図書分類目録」昭42.3 444, 92P. (新029.11; N)

昭和35年7月末日までに刊行された洋装図書を収録したもの。巻末に五十音順配列の書名と著者名の索引がついています。

12. 「早稲田大学図書館和漢図書分類目録」昭11.1—17.11 8冊 (旧017.77; W)

1. 総類部 (昭9年3月末現在)
3. 宗教部 (昭14年7月末現在)
5. 語学部 (昭16年12月末現在)
8. 芸術部 (昭13年7月末現在)
10. 伝記部 (昭11年12月末現在)
11. 地理部 (昭15年7月末現在)
18. 商業部 (昭12年12月末現在)
23. 統計部 (昭13年12月末現在)

各冊とも内容書名の五十音順索引がついています。

又特に専門分野の叢書については、専門の図書館又は研究機関の蔵書目録や、専門書誌の利用が考えられます。

次にあげるものは内容細目だけで内容索引のないものです。

13. 出版ニュース社「全集総合目録」戦後の継続全出版物 昭42.5 379P. (新027.4; S—2)

本書は昭和37年11月刊行の増補版。昭和42年1月現在で収録した戦後の主要な全集、講座、叢書類の分類目録です。昭和37年刊にくらべて内容細目がかなり記載されています。巻末に発行所名簿と双書名索引がついています。

14. 川島五三郎、八木敏夫「全集叢書総覧」4訂版 明初年—昭39年 八木書店 昭40.10. 552P. (新027.4; Z)

明治初年以来の全集叢書類を書名の五十音順に配列し、巻数、出版者、初巻の刊行年、定価を示してあります。主題別に通観することができないし、内容細目が記載されていません。ただ巻末に「特殊全集叢書内容一覧」のものだけ内容がでています。

以上列挙したツールをもとに、例として北条氏政の家臣三浦浄心(1565—1644)が見聞した江戸の雑事、人情風俗を誌した隨筆集、「慶長見聞集」(見聞集ともいう)10巻について、どういう叢書に収録されているか調べてみますと、次のような結果ができました。

国史文献解説 P.82「国民文庫」雑史集、「袖珍名著文庫」,「改定史籍集覧」10,「雄山閣文庫」
増訂日本叢書索引 P.126「統国民文庫」雑史集,「史籍集覧」,「同改定本」,「江戸叢書」,「袖珍名著文庫」
増訂綜合史料索引 P.219左「史集覧」,「改史集覧」10,「江戸叢」2,「統国民文」6,「袖名著文」25.
第四高等学校和漢叢書細目 P.248「江戸叢書」二, P.201,「雑史集」
大連図書館和漢図書分類目録 第1編 追録 総記 P.407「名著文庫」25
学習院図書館和漢図書目録 上巻 P.144「江戸双書」第二ノ内
宮内庁書陵部「和漢図書分類目録」下巻 P.826「史籍集覧」史料叢書
京都帝国大学附属図書館和漢書分類目録 第1 P.86「江戸叢書」第2 P.135「国民文庫」
神習文庫図書目録 P.440「改定史籍集覧」10.
内閣文庫,早稲田大学図書館和漢図書分類 目録 なし

なお、三浦浄心の「慶長見聞集」について本館の目録をひいてみると、書名目録にはなく、著者名目録の三浦浄心の下にだけ、「江戸叢書」巻の2,の中に収録されているものがでていました。ただし上記ツールによって収録している叢書名がわかったので、その叢書名でひいてみますと、「江戸叢書」以外に「改定史籍集覧」,「新訂増補史籍集覧」もこの図書館に所蔵されていることがわかりました。これは叢書の中の個々の著作から検索できるように十分な目録がつけられていないためですが、ツールを有効に利用すれば、多少は目録の不備も補うことができるわけです。

「黒い眼と茶色の目」ーピック・アップー

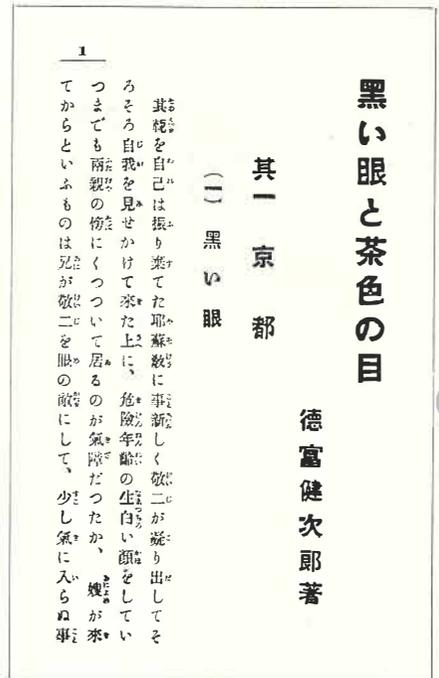
徳富蘆花は本名を健次郎といい、明治元年（1868年）に熊本で生まれています。彼の兄、蘇峯（猪一郎）は蘆花の生涯に大きな影響を与えました。彼が文名を得たのは兄の編集する『国民之友』、『国民新聞』などに執筆の機会が与えられたからだともいわれています。19才の時、同志社に復学した蘆花は、校長新島襄の姪山本久栄（山本覚馬の娘）と恋愛に陥り、周囲の人々の反対で生木を裂かれたも同様になり、同志社を退学してしまいます。

この小説『黒い眼と茶色の目』はこうした蘆花の同志社時代の、青春のひとつの、はかない淡い恋について、47才の時に、わずか1ヶ月で書き上げたもので、黒い眼とは新島先生のことを、茶色の目は久栄のことです。またこの『黒い眼と茶色の目』は25才のときに書いて、妻の目に絶対ふれぬところにかくされていた『春夢の記』の生れ変わりでもありました。

蘆花がこの小説を世に出すについては、父の死が大きな契機となり、真実の自己を押し出す勇気がやっと出たからでもありました。またこの書の出版については彼の終生の伴侶であり、晩年には共同制作者でもあった愛子夫人の激しい反対にあい、一時は原稿破棄が考えられていました。このため夫人は生死を分つ重い病に伏してしまいます。夫人の口述記『蘆花と共に』の中でこの『黒い眼と茶色の目』の出来ごとは蘆花夫妻間のクライマックスともいうべきことであつたと述べています。

この著作のはじめには「吾妻よ。二十一年前結婚の折おまへに贈らねばならなかつたのを、わしが不徹底の含羞から今日まで出しおくれたのが此書だ。」という妻への献詞が書かれています。一般には他愛のない告白であってもどのような苦しみと勇気を要するかは蘆花自身の性格によるものでしょうが、彼にとってはこの『黒い眼と茶色の目』の出版は重大な試練でもあった訳です。

この書は大正3年12月13日に新橋堂から出版されましたが、当館には大正3年12月14日に再版されたものが所蔵されています。



黒い眼と茶色の目 第一頁（本館所蔵）

あ と が き

“びぶりおてか” 第4号をここにお届けいたします。

新図書館建設については、基本方針は既に決定されているわけですが、場所の問題等のため、未だ具体的に着工の段階に至っておりません。大方の御理解をいただくために、「新図書館建築の経過」を徳永館長に記していただきました。

本年度図書館の一つの大きな特色は例年に倍して約100名の図書館実習生を受け入れたことでもあります。平素は、利用者側の立場だけしかみていなかった実習生が、立場を変えて、奉仕、管理、運用の立場に立って、図書館をどのように見、感じたかを特集いたしました。

学内の図書相互利用、大学間の図書相互利用に資すべき、諸総合目録の整備については一般図書と雑誌等に分けて、鋭意編集に努めておりますが、いよいよ、本学蔵書目録第一巻を発行する運びになりましたので、紹介記事を掲載いたしました。

“びぶりおてか” 同志社大学図書館報 No. 4. 1969年2月1日 発行
 発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 211 - 2311
 編集責任者 前川 嘉門